

〈研究論文〉

鳥取県における 2 つの自然保育認証制度の意義

——「自然体験活動」をめぐる議論の検討を中心として——

栃 原 華 子

鳥取県における2つの自然保育認証制度の意義 ——「自然体験活動」をめぐる議論の検討を中心として——

析 原 華 子

はじめに

近年、自治体が自然体験活動を推進するための制度創設の動きが高まっている。たとえば、2015年3月に鳥取県「とっとり森・里山等自然保育認証制度」、2015年4月に長野県「信州型自然保育認定制度」、2017年3月に鳥取県「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」、10月に広島県「ひろしま自然保育認証制度」、2018年3月に埼玉県「ちちぶ定住自立圏自然保育認証制度」等が創設されている。その他にも、自治体が独自に乳幼児期の自然体験や森林体験などの活動を支援する取組みが拡がりつつある。

鳥取県では全国に先駆けて「とっとり森・里山等自然保育認証制度」^①が創設された。認証にあたっては県独自の基準を満たす必要があり、実際に認証されているのは「森のようちえん」^②である。鳥取県ではその後、同制度とは別に2017年3月に「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」を創設した。つまり、2つの制度が併存するという特徴を有している。

ほぼ同時期に施行された長野県の「信州型自然保育認定制度」については、山口（2016）、高木（2017）らの先行研究がある。このうち高木（2017）は制度創設過程で「認可と認可」「保育の多様性」「認定基準」などの議論とともに「体験活動」をめぐる議論を取り上げている。この中で、制度創設過程で「野外」にこだわる行政側に対し、園内が主たる教育・保育の場とされる保育所・幼稚園等から自然に触れること

自体よりも、その体験から何を学ぶのが重要だとする意見や、自然環境だけでなく、人とどうかかわるのがポイントだという森のようちえんの意見から、行政側が「園内でのさまざまな体験活動も含むことにしたこととの整合性を図る関係もあり、自然体験活動よりも意味の広い体験活動の意義を強調することになったのであろう」（高木 2017：17）と述べている。このように「信州型」をはじめとし、森のようちえんや保育所・幼稚園等と県側の認識の整合性を図りつつ、森のようちえんのような認可外施設と保育所・幼稚園等を対象とした一体的な自然保育認証制度が創設された一方で、鳥取県では、森のようちえんと保育所・幼稚園等それぞれの自然保育認証制度が創設された。

後者の場合、自治体が森のようちえんの保育に対し一定の評価を与え、認可外施設が継続的に経費助成を受けられるよう県独自に支援する一方で、保育所・幼稚園等においても自然体験活動の拡充を支援するものであると解されるが、2つの自然保育認証制度を創設する意義について行政文書による説明は見当たらない。

また、鳥取県の自然保育認証制度についての先行研究では、塩野谷（2014）、塩野谷（2017）が鳥取県受託事業（森のようちえん効果研究事業）で「森のようちえん」の自然環境を重視する保育活動が幼児に与える影響についての調査報告を行った他、「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」創設後に、武田・南（2019）が制度運用上の留意事項を明確化する目的から保育所・幼稚園等を対象としたアンケート調査を実施しており、制度活用状況や見解等について現状把握や課題の検討がなされているが、2

つの制度創設の意義に言及したものではない。

そこで、本研究では、鳥取県における2つの自然保育認証制度に着目し、制度創設過程での様々な議論をもとに両者の保育理念や「自然体験活動」の認識の違いについて分析することにより、2つの自然保育認証制度それぞれの意義について考察することを課題とする。

そのために、本論文では、制度における「自然体験活動」の内容や認証基準を比較し、両者の特徴を明らかにした上で、2つの制度の創設経緯をたどる（第1章）。次に、それぞれの創設過程で実施された「子育て王国とっとり会議」「とっとり型の保育のあり方研究会」における議論や県による森のようちえん等へのヒアリング調査、「鳥取県協働提案・連携推進事業成果報告書」の「海外視察の結果と認証制度に向けての提言」（鳥取県 2016）等を検討資料として、県、森のようちえん、保育所、幼稚園、大学、地域住民など様々な立場からの議論をもとに、森のようちえんと保育所・幼稚園等のそれぞれの保育理念や「自然体験活動」に対する認識を明らかにする。その際に、①自然の認識、②自然の認識を基とした「自然体験活動」、③「自然体験活動」の質をめぐる議論、④地域との連携、の4つの観点を設定する。なお、「とっとり森・里山等自然保育認証制度」創設過程では、「森のようちえん認証制度検討会議」が森のようちえん主体で行われ県の議事録が残っていないため、それ以外の会議議事録や資料を用いることにする（第2章）。その上で、森のようちえんと保育所・幼稚園等のそれぞれ2つの自然保育認証制度の意義について考察したい（第3章）。

第1章 2つの自然保育認証制度の比較と創設経緯

(1) 2つの自然保育認証制度の比較

「とっとり森・里山等自然保育認証制度」は、全国に先駆けて、2015年3月25日に創設された。2021年10月現在の認証園は7園である^㉓。自然保育促進事業としては事業費が2365万2千円、人件費が475万3千円である。事業費の

うち、「とっとり森・里山等自然保育認証制度」の予算は、2201万円（事業補助費1800万円、保育料軽減補助費401万円）である^㉔。運営費は、認証された事業者に対して、利用者数に応じて運営費を補助し、負担割合は2分の1である。また、対象児童に係る保育料については、2分の1を補助するものである^㉕。制度の目的は、「1年を通して野外での保育を中心に行う園を鳥取県が設けた基準に基づき認証し、支援することで、鳥取県の豊かな自然を活かして子どもたちが健やかに育つこと」^㉖とされている。

その主な認証基準は次のとおりである^㉗。

- ・活動時間は、原則週5日活動すること。うち、週3回は自然フィールドで活動し、かつ、その1週間の活動時間は概ね10時間以上とすること。原則、年間39週活動すること。
- ・対象年齢は、2歳から5歳までを対象とすること。
- ・人員基準は、保育者は児童6人に1人以上配置し、最低でも2人は配置すること。保育者のうち1名以上は、保育士または幼稚園教諭であること。緊急時の医療的対応、定期健康診断等を行う嘱託医を置くこと。
- ・設備として、活動を行うための自然フィールドが複数あること。大雨・大雪や冷温から避難でき、または拠点となる施設を備えること。
- ・研修として、県が実施する研修会、県が委託して実施する保育士を対象とした研修会又は森のようちえん全国ネットワークが実施する研修会を年1回以上受講すること。
- ・安全対策として、安全対策マニュアル（予防、緊急対応両面）を作成し、それに基づき活動すること。

また上記の「自然フィールド」については、次に掲げる4つの基準を満たすこととされている。

- ① 複数の自然フィールドがあること。
- ② 拠点フィールドを設定すること。
- ③ 常に野外活動ができるように維持管理がさ

れていること。

- ④ 平地であって、危険個所から十分な距離があり、かつ、安全が確保され、昼食、朝の会及び帰りの会が行える場所を有すること。

一方、「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」は、2017年3月31日に、保育所、幼稚園、認定こども園等における自然保育の取組を推進するため創設された。県内では幼稚園、保育所、認定こども園は計196園（2021年4月現在）⁶⁶であり、2021年1月現在、認証園は32園である⁶⁷。自然保育促進事業の事業費のうち「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制」の予算は、164万2千円である⁶⁸。運営費は、認証された事業者に対して、利用者数にに応じて運営費を補助している。補助基準額は1施設当たり20万円、県の補助率は3分の1である⁶⁹。

制度の目的は、「県のめざす幼児の姿『遊びきる子ども』を目指し、子どもたちの『体力の向上』『感性』『探究心』『集中力』『自ら考える力』などを育成する場の一つとして鳥取県の豊かな自然を活用し、自然体験活動を行う保育所、幼稚園等の施設に対し、県が定める基準に基づき認証し、その活動を支援することにより、子どもたちの健全育成を図る。』⁷⁰と定められている。

その主な認証基準は次のとおりである⁷¹。

- ・活動計画については、園の活動方針、指導計画等に自然体験活動に関する事項を入れ、計画的に実施すること。活動に当たっては、地域資源を活用し、地域住民の協力を得られるよう努めること。
- ・活動時間は、3歳以上児に係る自然体験活動の時間が、園あたり平均して週6時間以上とすること。
- ・活動時の職員体制は、保育所等の配置基準によるものとする。自然体験活動を行う場合は、子どもの人数にかかわらず保育者は最低2人以上とする。

- ・質の担保として、県等が実施する自然体験活動に関する研修を受講すること。自然体験活動に関する内部研修を実施すること。
- ・安全対策として、県等が実施する安全対策研修を受講すること。自然体験活動における安全対策マニュアルを作成し、かつ、保育者と保護者に周知すること。避難又は危険回避ができる措置、けがや事故への迅速な体制を確保すること。
- ・活動内容は、県内での自然体験活動（森の中の散策、生き物観察、川・雪遊び、農業体験等）。

以上のように、活動にあたっては、森のようちえんにおいては複数の「自然フィールド」と明記しているのに対し、保育所、幼稚園等においては地域資源を活かし、県内での自然体験活動として、森の中の散策、生き物観察、川・雪遊び、農業体験等、自然との関わりについての具体例を挙げているのが特徴的である。また、活動時間数については、森のようちえんにおいては週に10時間以上とし自然フィールドにおける活動を主とした活動として基準が設けられているのに対し、保育所、幼稚園等においては6時間以上とし他の活動内容を考慮して基準が設けられている。また、安全管理については、森のようちえんが森や里山等の自然の中を活動場所としていることから、拠点フィールドや、一斉活動が行えるような平地を設けることによって安全確保ができるよう定められている。一方で、保育所・幼稚園等においては、安全マニュアル作成の他、県等が実施する安全対策研修を受講することや避難又は危険回避ができる措置、けがや事故への迅速な体制の確保が求められている。森のようちえんと保育所・幼稚園等の自然保育認証制度においては、それぞれの保育活動に沿って基準が設けられており、「自然体験活動」の違いによるところが大きいと考えられる。

(2) 2つの認証制度の創設までの経緯

1) 「とっとり森・里山等自然保育認証制度」の創設までの経緯

「とっとり森・里山等自然保育認証制度」は、智頭町の森のようちえん「まるたんぼう」の西村早栄子氏が、2008年に「智頭町に森のようちえんを作る会」を結成し2009年に智頭町が運営費を助成したことから始まる⁽⁹⁹⁾。2010年には、鳥取県は「子育て王国とっとり」の建国を宣言し、2011年に県が運営費の助成を開始、「職場体験事業費補助金」により研修生の人件費の補助、「鳥取力創造補助金」により宿泊型の短期体験経費の補助、「森林の癒し事業費補助金」によりスタッフの増員分、園バス運営費、フィールド設備費を助成（県、町が1/3ずつ補助）した。

2013年には、「鳥取県協働提案・連携推進事業」において、西村氏が森のようちえんの認証制度を提案した（鳥取県2016）。その背景には、森のようちえんの運営にかかわる国の幼保無償化の動向があった。同事業の概要「課題と目標」には、「園舎を持たず野外での保育を中心に行う森のようちえんは国制度の幼稚園・保育園の枠組みに入っていないため、支援制度が存在しない。そこで、この鳥取県において森のようちえんが活動の魅力を損なうことなく認証を得られる仕組み（制度）作りに官民学協働で取り組む」（鳥取県2016：13）とその趣旨が記されている。

また、森のようちえんへの支援には、県による移住者の促進を図ろうとする意図も見られる。2014年の6月県議会定例会では、知事が「森のようちえんのようなところも非常に評判がよいございまして、移住の誘因にもなっていたりしておりますので、…だんだんと鳥取の可能性というものがあると思っております。」⁽¹⁰⁰⁾と述べている。同年11月には日本経済新聞で西村氏が紹介され、それについては、同年11月県議会定例会で、知事が「都会の真ん中でマンションの一室で子供と向き合っただけで、母子で生活していくということは難しいと思った。そういう意味

で、大自然の中で伸び伸びと子育てができる森のようちえんというのを始めたのですよということであり、さらにそれに共鳴をして各地から移住者がやってくるという紹介がございました。…いろいろと効果のあるものを我々としても見きわめながらバージョンアップをして、移住策を強めてまいりたいと思います」⁽¹⁰¹⁾と述べている。県は、森のようちえんへの一定の評価をし支援すると同時に、県への移住者の促進を図ろうとした。

「鳥取県協働提案・連携推進事業」では、2013年度から2014年度までに「森のようちえん認証制度検討会議」（全3回）が森のようちえん主体となって開催された（鳥取県2016）。また、「森のようちえん主催者会議」（全4回）において、森のようちえんの発祥の地であるデンマーク及びドイツへの先進地視察が行われた（鳥取県2016）。2014年11月開催の第3回「子育て王国とっとり会議」では、会長から「県としてどんな認証制度とするのか、どういった基準で運営するのかすごく大事になってくる。子どもの発達を守っていくためには、きちんとした検証が必要で、結果は県民に開示していただきたい。」との指摘がなされた。

2014年からは、「多様な保育・幼児教育が求められ、また、自分で考え決定できる力を付ける必要性がいわれる中、野外保育等における子どもの発達を支援するため、県独自に新しい認証制度の創設を検討する」ことを目的とし、「森のようちえん等に対する運営費助成モデル事業」を行った（鳥取県2014）。この事業は「自然・地域のフィールドを活用して野外（園外）保育等を行う事業について、新しい認証制度（鳥取型）の創設を検討するためにモデル事業を実施する」⁽¹⁰²⁾もので、自然・地域のフィールドを活用して野外（園外）保育等を行うことが幼児の発達にどのような影響を及ぼすのかについて、鳥取大学地域学部へ委託され、2016年まで調査が続けられた。研究内容は、県内の森のようちえん等及び認可幼稚園の入所児童の発達について、児童の身体性、精神性、知性、社会性の観点から調査を行い、自然を活用した保

育事業の効果を検証するものであった。そして、2014年3月には、「対象となった「森のようちえん」の子どもたちは、同年齢の子どもたちに劣らず、身体的、精神的、知的、社会的に好ましい発達が得られているものと判断できた」（塩野谷 2014:15）と調査報告がなされた。様々な議論や調査報告を経て、2015年に「とっとり森・里山等自然保育認証制度」が創設された。

以上のように、森のようちえんが主体となり、保育の魅力を伝えつつ県独自の無認可施設への支援を求めたことをきっかけとし、県がその魅力を評価した上で、県にとっても移住者促進といったインセンティブを加えながら認証制度の創設を目指していった。制度創設にあたっては、デンマーク及びドイツの森の幼稚園の先進事例を参考とし、日本における「森のようちえん」の活動を検討したり、県内の自然・地域のフィールドを活用した野外保育等の幼児の発達への影響の検証を行ったりしながら、県独自に認証制度を創設していこうとした経緯があった。

2) 「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」の創設までの経緯

塩野谷（2014）による森のようちえん効果研究事業報告においては、保育所・幼稚園等の自然体験活動の教育上の効果についても述べられている。報告では、「いわゆる認可の幼稚園や保育園などでも、従来から自然環境を保育に取り入れる傾向は強い。園外保育に積極的に取り組む例は多く、園の敷地内でも、園庭の植栽を豊かにしたり、井戸を掘って水を流したり、ビオトープを設けたりすることもある。この点では、小学校以上の学校においても校庭の一角に森をつくる例もあり、教育上の効果は非常に大きいと思う。」（塩野谷 2014:16）と述べられ、森林のような大規模な自然環境から遠い街中の子どもにもそれが発達保障上望ましいものならば、そのような方向性も支持されてよいことや、「鳥取方式の芝生化促進事業」などの実績を踏まえ、さらに行政による施策が期待される

ことが述べられている。

2014年8月には、保育所・幼稚園等での野外保育・教育を支援するものとして、「地域少子化対策強化事業」の「自然に学び、遊びきれ、とりっこ事業」が開始された。この事業の目的は、「県土のうち、73%が森という豊かな自然環境にある。その貴重な財産を活かして子どもたちが野外活動する機会を得ることは、心身の発達にも大変意義があると考ええる。このことから、県内でも広がりつつある『森のようちえん』や『里山保育』を参考にしながら、別に独立したものとして『既存の保育施設における鳥取県の豊かな自然を活用した野外保育・教育』を充実させることで、あらゆる県内の子どもに、鳥取県の『豊かな自然』で“遊びきる”機会を保障する環境を構築する」⁽⁴⁾ というものである。保育施設等への野外活動支援として、県内で野外保育・教育を定期的に行う保育施設にその必要経費の一部を補助することや、野外保育研修会の実施として、保育・幼児教育と自然活動双方に精通した野外保育の担い手を育成するため、全県の保育従事者を対象とし野外保育研修（野外活動事例研修、安全対策研修）を実施するものであった。

2015年に「とっとり森・里山等自然保育認証制度」創設された後、翌年の2016年には「とっとり型保育のあり方研究会（以下、「研究会」と略記）」が県によって設置された。この研究会の設置目的は、第1回研究会議事録によると、「これまで本県が先進的に取り組んできた子育て支援施策の成果と課題をとりまとめ、鳥取県の特色を活かした保育・幼児教育の方向・あり方を研究し、今後の本県における事業展開や国への制度改正に係る提言等を行う」ことであり、県、大学学識者、地域住民、保育所、幼稚園、市町村などが委員となって、第1回から第7回まで開催された。この研究会の中で「保育所、幼稚園等とっとり自然認証制度」の検討が行われ、また、森のようちえんへのヒアリング調査なども行われた。

以上のように、森のようちえんの認証制度が検討される中で、保育所・幼稚園等に対しても、

大学学識者から園内、園外の自然を活かした教育上の効果について述べられ、行政の施策が期待された。県は、保育所・幼稚園等においても、地域の自然環境を活かした野外保育を充実させ、鳥取県の「豊かな自然」の中で“遊びきる”機会を保障するため、保育所・幼稚園等に向けた自然保育認証制度創設することを目指した。制度創設に向けては、全7回の研究会の中で、県、大学学識者、地域住民、保育所、幼稚園、市町村など様々な立場から、幼稚園・保育所等の「自然体験活動」について議論がなされ、制度内容や制度基準について検討されていった。

第2章 「自然体験活動」をめぐる議論

次に、「子育て王国とっとり会議」、「とっとり型の保育のあり方研究会」、制度創設に向けたヒアリング調査、「海外視察の結果と認証制度に向けた提言」などを検討資料として、県、森のようちえん、保育所、幼稚園、大学、地域住民など様々な立場からの議論をもとに、森のようちえんと保育所・幼稚園等のそれぞれの保育理念や「自然体験活動」に対する認識について①自然の認識、②自然の認識を基とした「自然体験活動」、③「自然体験活動」の質をめぐる議論、④地域との連携、の4つの観点から明らかにする。

(1) 「自然」の認識

森のようちえんの「自然」の認識については、デンマークやドイツの視察結果によると、保育の場となる森については、街と森が一体的となっていてところが多く、デンマークでは日本の森と比較して庭の延長というイメージであることや、ドイツでは住宅から自転車を通えるくらい身近にある存在であるということが述べられている（鳥取県 2016：57）。第4回研究会議事録によると、森のようちえんへのヒアリング調査の中で、智頭町の森のようちえんでは、「自然の中でのびのびと」という保育方針を挙げており、これに関しては「智頭の町がそっくりそのまま園舎」であると説明している。また、「智頭という山里の環境を最大限に活かし、ここで

しかできない子育てにこだわって活動している」としている。さらに、「おもちゃや遊具などの人工物の使用についてどのように考えるか」という問いに対し、森のようちえんは、「人工物の持ち込みは禁止している。自然物が子どもたちの感性によりおもちゃや遊具となり、その中で遊びが展開されていく。」と答えている。

一方で、保育所・幼稚園等の自然の認識については、以下のような意見から窺うことができる。野外保育を実施する保育所は、「（ワクワク散歩を始めたことにより）外に出ることによって、自分から小動物に触れ、…（園で）小動物を飼うことになった際には、積極的に、何をどうすればよいか考え、行動するようになっていった」。また、野外活動を実施する認定こども園は、「田んぼを借りて、ジャガイモや稲を栽培」したり、農家での「牛舎の仕事体験」、「葉っぱを使った作品を作ったり」、「ツクシやワラビ、タケノコなどを調理して食べる」などとしている。また、「これからも今ある環境の中で、どのような活動ができるのか模索していく必要がある」との考えも述べている。

これらの意見を受け、森のようちえんと保育所・幼稚園等の「自然」の認識の違いについて、大学学識者から次のような指摘があった。「自然体験活動とは、野山へ行くことと田んぼへ行くことでは大きく異なり、どのように整理するか議論していくことになると思う」、また別の学識者からは、「森のようちえんと保育所、幼稚園の違いとしては、環境の捉え方にあると思う」と指摘があった。また、「認証制度の対象となるフィールド（自然環境）をどのように捉えるか考えていく必要があり、文化的な領域と自然環境との接合した部分（田んぼなど）」についても自然として捉えていくのか」について十分に検討が必要だとする旨が述べられた。

第4回研究会では、保育所から「ワクワク散歩」のように園の周辺の自然に触れ合う体験や園庭自体をビオトープにより自然を表現し、自然体験活動などを行っている場合の活動は含まれるのか」との問いがあった。この問いに対しては、県担当者は「先進県では要綱に定義づ

けられていない」との答えに留まっていたが、その後議論を重ね、第7回研究会では、「活動場所については議論を何度かしてきたが、各園で工夫されてビオトープのような空間をつくられたり、木を植えたりと園庭を活用した自然体験活動も行われており、これを対象とすることで、必ずしも園外に出ないといけないということではないと考えている」と述べた。県は、これらの森のようちえんと保育所・幼稚園等の「自然」に対する認識について、「具体的にどのように自然体験活動で活かしていくか、自然体験活動への認証制度を実のあるものとするために必要となってくる」と述べた。

(2) 自然の認識を基とした「自然体験活動」

森のようちえんは、デンマークやドイツの視察を受けて、保育方針について「自然とのふれ合いは子どもの発達にとって一つの重要ポイントである」とし、デンマークでは「子どもの“個”を延ばすことを第一としているが、最近では組織・協調性も意識している」「自然で遊ぶことにより、感性、独創性、自主性など向上させるという考えがある」（鳥取県 2016：58）としている。また、県内の森のようちえんへのヒアリング調査結果によると、実際の自然体験活動の内容や保育理念については次のように記述されている。1日の活動は「森での自由行動、お散歩が主の活動」であり、「森のようちえんの特徴としては、自然の中で過ごすこと、見守る保育を行うことである。」「見守ることにより、その子の感性に寄り添い、自尊感情、自主性が育てられ、自主的、主体的な子どもに育つものと考ええる」。さらに、森のようちえんの設立者から、設立の経緯については、「今の子育ては、危ないことをすぐに止めてしまうところがあり、一昔前の子どもたちが森で遊ぶような環境をつくりたいと考えて設立したところもある」と語られている。

一方で、保育所・幼稚園での「自然体験活動」については、第4回研究会で、野外保育を実施している保育所が次のように述べている。「『ワクワク散歩』で自然に触れ、地域の人と交流し、

その体験を友達に伝え、自然を大切にするといった4つの点を大切にしている」「地域の方と繋がりをもつようにしており、七夕では、山から笹をいただき運んだり、『ワクワク散歩』で一緒に出かけたりしている」「地域の方から畑や田んぼを借りて、ジャガイモや稲などを栽培し、収穫をしたり、農家にお邪魔して牛舎の仕事体験などを行っている」。

これらの意見を受けて、第5回研究会では、大学学識者を中心に、認証制度を創設するにあたり、自然体験活動をどのように捉えるのかについて以下のような議論がなされた。「自然体験活動をどのように捉えるのか非常に難しいところであり、保育指針でも自然の中で植物に触れていくということは定められており、保育所や幼稚園でも何らかの自然体験活動は実施されている。認証制度の自然体験活動については、保育所や幼稚園が少し頑張れば実現できるものを目指していくべきではないか」、また別の学識者からは「自然体験活動をどのように捉えるのか、どのあたりにハードルを置くのかということについては、よく議論していく必要があると思う。自然体験活動については地域交流事業などに関連させていくことが大切」という意見があった。さらに別の学識者から、「認証制度での自然体験活動については、きわめて限定的な活動を最初から年頭に置くのではなく、…園の創意工夫により豊かな自然体験活動が行われていくことに重点をおいてもらえたらと思う」と議論がなされた。また、第7回研究会では、一般公募の委員から、「自然体験活動については、どの園でも野外や園庭の活動について工夫されており、認証制度が整うことで、今までの活動が増えたり、幅が広がったりすることを期待したい」という意見があり、県担当者からは、「鳥取の保育、幼児教育の現場では自然体験活動に限らず、工夫をして取組みがされていることを改めて見えてきたと思うので、そういったことを踏まえて、しっかり取り組んでいきたいと思う」と述べられた。

(3) 「自然体験活動」の質をめぐる議論

森のようちえんの活動時間や安全管理等の認証基準について第3回と第4回子育て王国ととり会議で議論がなされた。また、保育所・幼稚園等についても、第4回の研究会から認証基準について議論がなされた。制度創設に向けて、安全管理基準、職員配置基準、活動時間基準など、主に量的な議論がなされる一方で、「自然体験活動」の質をめぐる議論も見られた。

森のようちえんについては、第4回子育て王国ととり会議の議論の中で「急な天候不良等の場合の避難場所の確保をしてほしい」「安全対策だが、救急用具の中身も入れてほしい」等、安全管理についての意見が述べられた。一方、制度創設後の森のようちえんへのヒアリング調査では、「安全面についてのマニュアル作成や意識している点」について次のように述べられている。「大きな怪我が起こりうる可能性のある危険な場所については、一方的に大人が行動範囲から除くのではなく、園児に見てもらい危険な場所であると認識させるようにしている。」「多少の危険な場所で失敗して怪我をすることで学ぶこともあると思う」と幼児が自主的に危険な場所を認識したり、経験から学んだりするといったことを重視するような意見があった。

一方、保育所・幼稚園等については、第4回研究会で、安全管理を踏まえた職員配置について、保育所から「認証制度の中で職員配置を保育所の配置基準にプラス1名などの基準を定めても、野外活動を行うには、心許なく、もどかしく思う。」と述べられた。また、第7回研究会で、大学学識者から「自然体験活動の認証を行う際には、安全面でしっかり専門家などのチェックが必要である。」とした上で、「逆に、活動内容については、保育者の創意工夫を保証する意味で、認証制度により具体的に規定しない方がよいのではないかと思います。」と述べられた。第5回研究会では、市から「質の担保については、安全対策に関する研修などを受講してもらいたい。」という意見や、地域住民から「安全対策についてはマニュアル整備や研修をしっかりやってもらいたい」という意見が出され

た。安全管理を重視すると同時に、自然体験活動の質をより高めるための幼稚園、保育所への研修や安全対策について議論がなされた。

また、活動時間については、「週何時間の活動時間にするか」についての議論がなされる中、第5回研究会では、大学学識者から、「活動時間の議論があるが、時間よりも質を考えて、活動内容について柔軟に評価できる仕組みが大切であり、その活動内容に応じた時間設定が望ましいのではないか。」と述べられた。

(4) 地域との連携

森のようちえんへのヒアリング調査では、自然フィールドについて、「14か所のフィールドにより、智頭町全体を使用するダイナミックな保育を実践している」と述べられている。また、「14か所のフィールドについては、個人から貸してもらえたり、現地の自治会で同意してもらった上で、貸してもらえてるフィールドもある。」と述べられ、地域の人の協力により森や川や山のフィールドで自然保育を行うとしている。

また、保育所、幼稚園等においても、地域と連携について次のような議論があった。第4回研究会では、野外保育を実施している認定こども園では「地域の方から畑や田んぼを借りて」野菜を栽培したり、「農家にお邪魔して牛舎の仕事体験などを行っている」「地域の方々にどんどん声掛けを行い、長く付き合っていくのが本園のスタイルである」と述べている。これらの意見を受け、大学学識者から「自然への関わり方も重要であり、地域の方と連携して、町づくりとも兼ねることなどができれば、独自性のあるものができるのではないか」「自然体験活動を行うにあたって、園内と異なり、自然フィールドでは誰かの協力が必要であり、それが地域の連携や地域社会との協力が重要であると考え、この部分もどのように取り組んでいくのか詰めていく必要がある」「地域の方々との自然体験活動を行う場合、行政が地域と園を結ぶ懸け橋となり、自然体験活動についてトライしやすい環境をつくることも大切であると感じ

た」という意見が述べられた。

これらの意見を受け、県担当者は、「委員からも意見が出たように地域との結びつきが重要になると思う。既にあるネットワークや県でも高齢者が活躍できる人材バンクのようなものもある」と提案があった。第5回研究会では、地域との協力や地域の自然の活用についてさらに議論がなされた。市からは、「自然フィールドを活用することから、その地域の方に協力を求め、地域とのつながりを深めて行けたら良いと思う」という意見があり、地域住民も「地域とのつながりを重視した活動内容となればよいのではないか」と述べた。また、大学学識者から、「自然体験活動については、地域交流事業などに関連させていくことが大切であり、実施園についても地域貢献がやりやすくなる部分もあるのではないか」と述べられた。第7回研究会では、県担当者は、保育所・幼稚園等について「立地によっては、都市部の中にあって、なかなかそういう自然といっても森の所までは行きにくいというようなこともございます。ただ、そういうところもいろいろな近くの公園でも本当に木が植わっていてその木々の中で自然を感じるということもありますので、少し広めに取りたいなということもございまして、…自然体験という定義につきましては野外を中心に豊かな自然環境や地域資源、これが自然の中で営まれる各地域による農林水産業等及びこれらに関わる人々をいうとしておりますが、こうした自然環境や地域資源を体や五感を使って積極的に活用したさまざまな体験活動をいうことにさせていただいており…どうしても本物の人工物のない森の中に入らなければいけないということではなくて、園の近くに出かけて行って、そこにある自然に触れ合うということも含めて活動をしていただきたいというふうに考えております。」と述べている。

第3章 2つの自然保育認証制度の意義

(1) 森のようちえんの自然保育認証制度の意義

「とっとり森・里山等自然保育認証制度」は、デンマークやドイツにおける森のようちえんを

参考とした上で検討がなされた。デンマークやドイツの「森」が原生的な自然を多く残し、「街と森が一体的となっている」といったように、「森」の地形的特徴の違いや人々の「森」の認識に違いはありつつも、鳥取県の豊かな山里の環境を最大限に活かした「自然体験活動」を認証しようとするものであった。そこで、制度においては、森の多くを占める「里山」をはじめとし川・海・自然公園等、文化的な領域を含みつつもより豊かな「自然」を大きな枠組みで「自然フィールド」として認証基準に定めた。

そして、このような「自然フィールド」において行われる「自然体験活動」は、森のようちえん独自の保育理念や自然の認識をもとに、森での「自由行動、お散歩」を主な活動内容とし、自然の中で過ごす中で、保育者は子どもを見守ることによって「子どもの感性に寄り添い、自尊感情、自主性を育て、自主的、主体的な子ども」に育てることや、「自然物が子どもたちの感性によりおもちゃや遊具となり、その中で遊びが展開されていく」ことを大切にしている。そして、時には思い通りにならないような自然の直接的体験の中で、子どもたちが森の自然をどのように扱うかについて考えたり決めたりしながら遊びや生活を作っていくことを重視している。このように子ども自身で考え行動するような幼児の自主性や主体性といった森のようちえんのもつ独自の保育理念をこの認証制度によって保障した。

さらに、安全管理について、森のようちえんが独自のマニュアルを作成することによって、危険な場所については「一方的に大人が行動範囲から除くのではなく、園児に見てもらい危険な場所であると認識させるように」とするといったことや「多少の危険な場所で失敗して怪我をすることで学ぶこともあると思う」といったように、自然の営みに合わせながら、子どもが主体的に行動し、経験から学ぶといった森のようちえんの保育理念を反映させた。

このように、森のようちえんにおいては、保育所・幼稚園等とは別に、鳥取県の里山等の豊かな自然環境を「自然フィールド」とし、「子

どもが自ら考え、自分で自分の遊びと生活を創ることができる」(今村 2014) といった森のようちえん独自の保育理念を制度に反映させ、森のようちえんの「自然体験活動」を保障した上で支援を行うような仕組みを構築した。

(2) 保育所、幼稚園等の自然保育認証制度の意義

保育所・幼稚園等においては、園庭の自然環境を「自然」としているところも多い。これについては、保育所・幼稚園等での園庭の自然環境の調査において、「自然とのより豊かなかわり考えた場合には望ましい雑草のはえる場所や小動物の住处となるような場所、自然の多様性や循環性という特質を示す場所をもつ園は、一層少ない」という現状が明らかにされている(井上、無藤 2006)。

制度創設過程では、各園で園庭を工夫してビオトープのような空間をつくったり木を植えたりするなどの「自然」について語られていた。この認証制度においては、これらの空間についても「自然」の対象とすることとし、必ずしも園外に出るものや人工物のない自然を「自然」とするのではなく、それぞれの園の創意工夫によって子どもたちが自然体験活動を行うことに重点をおくものとして制度が創設された。

また、園外における「自然体験活動」については、例えば、「ワクワク散歩」では、地域住民との交流を含んだり、地域の方から畑や田んぼを借りて稲や野菜などを栽培・収穫する、農家にお邪魔して牛舎の仕事体験などを行う、七夕で山から笹をいただき運んだりする、といったように、自然の中で、子どもたちが地域の人とのかかわりをもつような、より文化的な領域の「自然」を制度内容に反映させていった。

制度基準では、森のようちえんが「自然フィールド」という大きな枠組みで捉えているのに対し、保育所・幼稚園等の「自然体験活動」については、「地域資源を活かし、森の中の散策、生き物観察、川・雪遊び、農業体験等」と具体的内容を示し、文化的な領域で地域とのつながりをもった「自然体験活動」を推進する形で、認証基準を定めた。

このように、保育所・幼稚園等においては、これまで行われてきた「自然体験活動」を基に、さらに園の創意工夫によって実現できる形で認証基準が定められ、地域住民と連携しながら、地域の自然を活用した自然体験活動の充実を図るような仕組みを構築した。

おわりに

本研究では、森のようちえんと保育所・幼稚園等の保育理念や「自然体験活動」に対する認識により、2つの自然認証制度それぞれに意義があることを明らかにした。もちろん、森のようちえんや保育所・幼稚園等には多様な保育理念や自然体験活動が存在し、本研究がそれらの明確な境界の存在を示すものではない。しかしながら、2つの自然保育認証制度を設けることにより、認可施設である保育所・幼稚園等だけではなく、「森のようちえん」がもつ根本的な保育理念や自然体験活動の認識について理解がなされた上で、自治体が独自に支援を行うことが可能となったことが大きな意義ではないかと考える。

今後も、各地の自治体によって認証制度が検討されていくと考えるが、それぞれの保育理念や自然体験活動に対する認識については多様な立場からの議論を重ね検討がなされていくことが、今後の幼児教育における自然体験の充実につながるのではないかと考える。

一方、この2つの認証制度に対する課題についての議論もある。制度創設過程で、保育所や幼稚園等では野外活動について良いものだと認識しながらも、その知識やノウハウがなく行うことが難しいといった意見もあった。この課題に対しては、市町村から「自然体験活動について経験不足や知識不足による先生の不安があることから研修などを行う必要がある」との意見があり、これに対しては、自然保育の実践に関する研修会が設けられているが、さらに森のようちえんと保育所・幼稚園等の交流を行ったり相互理解を図ったりすることにより自然活動、安全管理のノウハウを共有することなども課題としている。しかし一方で保育所・幼稚園等で

職員の研修機会を保障しにくいといった現状もまた課題となっている（武田，南 2019）。また，保育所・幼稚園等においては限られた人数の中で保育が行われており，安全管理体制を構築した上で野外等での自然体験活動を行うには人員不足であるとの声もある。このような保育所，幼稚園等における実情を鑑みて，自治体による研修の充実や人材育成が行えるような仕組みづくりを今後さらに充実させていくことが重要である。

このように，創設された認証制度にはいくつかの課題が存在している。本研究では，2つの認証制度の意義や仕組みを制度や創設過程の議論から分析するに留まっており，実際にこれらの制度がどのように運用され，どのような効果または課題があるのかといったことについては，今後も調査が必要である。また，自然保育認証制度だけではなく，各自治体で行われている多様な自然保育の支援制度にも着目し，無認可である森のようちえんへの支援制度の拡充や，保育所・幼稚園等における自然体験活動のあり方について，他の制度と比較検討することも今後の研究課題としたい。

注

- (1) とっとり森・里山等自然保育認証制度実施要綱による。ここでの「自然保育」とは，「自然フィールドを中心に行われる自然体験を中心とした子育て並びに保育又は幼児教育」を指している。詳しくは下記参照。（2021年10月30日参照）
<http://www.pref.tottori.lg.jp/secure/975793/morisatoyamaninsyojissiyoukou.pdf>
- (2) NPO法人「森のようちえん全国ネットワーク連盟」の「設立趣意書」によると，森のようちえんとは「自然体験活動を基軸にした子育て・保育，乳児・幼少期教育の総称」であり，「森」は，森だけではなく，海や川や野山，里山，畑，都市公園など，広義にとらえた自然体験をするフィールドを指し，「ようちえん」は，幼稚園だけではなく，保育園，託児所，学童保育，自主保育，自然学校等が含まれており，乳児・

幼少期の子ども達を対象とした自然体験活動を指す。詳しくは下記参照。（2021年10月30日参照）

<http://morinoyouchien.org/charter>

- (3) とっとり森・里山等自然保育認証制度の概要は下記参照。（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/239563.htm>
- (4) 子育て人材局「議案説明資料 予算に関する説明書」の鳥取県令和3年度一般会計当初予算説明資料による。（2021年10月30日参照）
https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1235983/R3_fu_kosodate.pdf
- (5) とっとり森・里山等自然保育事業費助成補助金交付要綱（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/925859/kohuyoukor10827.pdf>
- (6) 鳥取県令和3年度学校基本調査（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1257137/R3-gakkoukihon-youyaku.pdf>
公立保育所一覧（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/847270/koritsu.pdf>
私立保育所一覧（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/847270/watakushiritsu.pdf>
- (7) 保育所，幼稚園等とっとり自然保育認証制度の概要は下記参照。（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/267067.htm>
- (8) 自然に学び，遊びきれ，とりっこ事業補助金交付要綱（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1078988/h30youkoutorikko.pdf>
- (9) 保育所，幼稚園等とっとり自然保育認証制度実施要綱による。（2021年10月30日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1078989/youkou.pdf>
- (10) 鳥取県福祉保健部子育て王国推進局，2018，『鳥取県における自然保育の取組』（2021年10月30日参照）
http://mori-zukuri.jp/wp_foresapo/wp-content/uploads/2018/07/04_tottori20180713.pdf

- (11) 鳥取県議会「平成 26 年 6 月定例会（第 6 号）」
〔平井知事発言 24〕（2014 年 6 月 24 日）
<http://www.db-search.com/tottori/index.php/>（2021 年 10 月 30 日参照）
- (12) 鳥取県議会「平成 26 年 11 月定例会（第 3 号）」〔平井知事発言 4〕（2014 年 12 月 2 日）
<http://www.db-search.com/tottori/index.php/>（2021 年 10 月 30 日参照）
- (13) 「森のようちえん等に対する運営費助成モデル事業」（2021 年 10 月 30 日参照）
http://db.pref.tottori.jp/yosan/26Yosan_Koukai.nsf/fe62035bf3205844492574820038e292/4f0d7b2e127d8b4949257c77005cc244?OpenDocument
- (14) 地域少子化対策強化事業実施計画書（2021 年 10 月 30 日参照）
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/911414/2jikenkeikaku.pdf>

一次資料

- 第 1 回とっとり型の保育のあり方研究会議事録
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1034370/gjirokugaiyou.pdf>
- 第 4 回とっとり型の保育のあり方研究会議事録
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1053430/gjirokugaiyou4.pdf>
- 第 5 回とっとり型の保育のあり方研究会議事録
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1053431/gjirokugaiyou5.pdf>
- 第 7 回とっとり型の保育のあり方研究会議事録
<https://www.pref.tottori.lg.jp/secure/1059162/gjirosku7.pdf>
- 第 3 回子育て王国とっとり会議議事録
http://www.pref.tottori.jp/db/shingikai_wkaigiroku.htm
- 第 4 回子育て王国とっとり会議議事録
http://www.pref.tottori.jp/db/shingikai_wkaigiroku.htm

参考文献

- 井上美智子，無藤隆，2006，「幼稚園・保育所の園庭の自然環境の実態」，『乳幼児教育学研究』，14，1-11.

- 今村光章，2014，「現代の学校教育の再考契機としての森のようちえんの意義—「自然学校としての森のようちえん」を手がかりに—」，『環境教育』，23(3)：4-16.
- 塩野谷齊，2014，「森のようちえん」において自然環境の中で行う保育活動が幼児の身体的・精神的・知的・社会的発達に与える影響について」『鳥取県農林水産部受託事業（森のようちえん効果研究事業）報告』，1-19.
- 塩野谷齊，2017，「森のようちえん」の自然環境を重視する保育活動が幼児に与える影響について—卒園児保護者への聞き取りを中心に—」『鳥取県農林水産部受託事業（森のようちえん効果研究事業）報告』，1-22.
- 高木三郎，2017，「「信州型自然保育認定制度」の創設過程と意義についての考察」，『富山短期大学紀要』，53：12-26.
- 武田信吾，南潮，2019，「地方行政が進める自然保育における現状と課題—アンケート調査に基づく実態把握—」，『鳥取大学教育研究論集』，9：45-58.
- 鳥取県，2014，『子育て王国鳥取県の取組』全国知事会次世代育成支援対策 PT 会議資料，1-2.
- 鳥取県，2016，『鳥取県協働提案・連携推進事業成果報告書（平成 25 年度採択事業）』，13-18. 49-59.
- 鳥取県福祉保健部子育て王国推進局子育て応援課，2014『子育て王国とっとり条例に基づく子育て王国とっとり推進指針』
- 山口美和，2016，「森のようちえん」をめぐるポリテイクー「信州型自然保育」検討委員会の議事録分析を通して—，『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 研究室紀要』，42：215-225.

The Significance of Two Authorization System of Early Childhood Education and Care in Nature in Tottori Prefecture : Focusing on the examination of discussions on “Nature Experience”

Hanako TOCHIHARA

In Tottori Prefecture, there are two Authorization Systems of Early Childhood Education and Care in Nature, one for waldkindergarten and other for nursery schools and kindergartens. The purpose of this paper is to study the significance of the two Authorization Systems by clarifying the background of the establishment of the systems and the differences in the philosophy and the recognition of “nature experience” between waldkindergarten and nursery schools/kindergartens from discussions.

Examining the perception of “nature experience” at a system building meeting from four perspectives, the philosophy and the recognition of “nature experience” between waldkindergarten and the nursery schools/kindergarten indicated differences.

As a result, the following two elements of significance are clarified.

1. The certification system for waldkindergarten guarantees the philosophy and the recognition of “nature experience” of waldkindergarten, such as children actively and independently thinking and creating play and life in “Satoyama”.
2. The certification system for nursery schools and kindergartens guarantees the realization of “nature experience” that makes the most of the local nature by devising each method and collaborating with local residents.